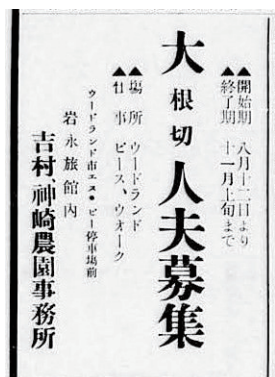


第5代院長 神崎驥一 ——日米日本人会書記長時代

学院史編纂室主任研究員（元経済学部教員） 井上 琢智

神崎驥一（1884-1959）は陳三・サタ夫婦の次男として岡山から一時離れた東京の麹町で生まれた。岡山県御野郡内田村（1889年に岡山に編入）で幼少期を過ごした。父の友人溝手文太郎牧師を通じて関西学院院長の吉岡美国に紹介され普通学部^{いぬいせいまつ}に入学した。その普通学部を乾精末らとともに1901年3月に卒業し、新設の英語専修科に4月入学し、1903年3月まで在籍した。その時代に渡米を志した。渡米後、1906年12月26日には王府の南美以教会クリスマス祝会司会、翌年5月14日の南美以連合親睦会（於：王府）での講演、1909年6月15日の青年会連合説教会で神学部卒柳原直人祈祷の司会、桑港の美以教会で1909年7月24日「日常生活と宗教」を話すなど教会活動をした。その後、カリフォルニア大学で経済学、史学を専攻し1909年12月に卒業、1910年に文学士（Bachelor of Arts）を取得し、その年に進学した大学院で史学および政治学を学んだ。卒業後の1911年1月以降、1913年12月まで吉村神崎農園を経営した。その証拠に『新世界』等に1912年8～9月にかけて「〔砂糖〕大根切 人夫募集……場所ウッドランド」との広告を出し、何百人の日本人、ギリシャ人、メキシコ人、朝鮮人等を雇用したという。



『新世界』（1912年8月13日）

他方、「シマ農園」で高品質のポテト生産に成功した「ポテト王」牛島謹彌²〔写真〕らは「在米同胞の福利増進を以て目的」とする「同胞の自治団体」在米日本人会を1908年に設立した。この在米日本人会に書記長として関わったのが乾精末と神崎驥一であった。

乾の就任について『新世界』（1912年11月9日）によれば、世間にはこの日本人会を軽視する向きがあるが「在留同胞七万の統轄団体」で「其任務たるや極めて重大」だが内紛により書記長選任に難渋した結果、ミシガン大学在学中から「冒険家」等として活躍した乾精末の「過去」「人格」「技倆」を知悉した参事員諸氏の推薦ゆえ彼等を「信頼」し「乾

氏の御手並を拝見」とした。「お手並み拝見」を待つまでもなく乾は実質具体的な書記長としての仕事はできなかった。そのため東京帝大出の『日米新聞』記者の相良忠道が書記長に就任したが、1915年4月10日のデンバーの『コロラド新聞』によれば、はやくもその後任が課題となっていた。種々議論の末、参事員会は「適当なる候補者なき為め」に「現書記神崎驥一氏を推薦した」が、「心細き限りなり」と嘆いた。とはいえ1915年9月23日の『日米新聞』では「在米日本人改正規約 神崎驥一書記長として説明」とあり、神崎が正式に書記長として活動していた（～1921年4月）。

在米日本人会書記長としての神崎驥一が扱った課題は、(1) 排日土地法など米日本人排斥問題（歴史と現状）、(2) 日本と民主主義問題－「日本は建国来の真デモクラシー国」、(3) 写真結婚問題、(4) 在米二世の国語教育問題、(5) 移民の宗教問題、(6) 徴兵問題などであり、いずれも「在米同胞の福利増進を以て目的」とする在米日本人会の方針に添うものであった。

1920年7月24日から関西学院への神崎の帰院が報道されるなかにあっても1920年秋から須市、桜府、桑港などで巡回開催された「時局講演会」に参加するだけでなく、12月20日からニューヨーク、ワシントンで神崎は書記長として訪問している。このように日米日本人会書記長神崎は「時局に対し最も大なる責任を有する公共団体〔在米日本人会〕」の書記長としての「特殊責任ある地位」を最後まで自覚し行動した。（いのうえ たくとし）



写真 在米日本人会 1912年（『リトル・トウキョー 100年』1987より）
前列右から3人目が牛島謹彌、後列右から3人目が神崎驥一

1 新聞記事は Hoover Institution Collections の「邦字新聞デジタル・コレクション、<https://hojishinbun.hoover.org/?l=ja>」に基づく。

2 山田義雄「花は一色にあらざーアメリカで「ポテトキング」と呼ばれ日本人の心を伝えた牛島謹彌一」（西日本新聞社、2008）。